

3. スポーツクライミング

スポーツクライミング概論

—アルパインクライミングの立場から—

馬 目 弘 仁

1. スポーツクライミング

このところフリークライミングは、マスコミで紹介される機会が増えてきました。アウトドア専門誌はもちろんのこと、最近では女性向けのタウン誌でもアウトドアスポーツのひとつとして紹介記事が載るようになってきました。それに対する私の職場の同僚の反応を思うとフリークライミングも随分と一般の人々に認知されてきたのだと感じます。『日本でもようやくスポーツとして市民権を得つつある』と言ってもいいのではないのでしょうか。

クライミングが一般にスポーツとして受け入れられるようになってきた背景にはフリークライミングそのものの変化が深く関わっています。元来、クライマーの側には、クライミングはスポーツとは相いれないものだという考え方が主流でした。しかし今では、クライマーの側のクライミングに対する考え方は随分多様化してきています。

『スポーツ』としてクライミングを考える場合、一般的価値基準として、安全性は絶対に無視できない要素になります。そこでその基本となるプロテクションに対する考え方（≒スタイル）の変遷から追って、スポーツクライミングがどのように分化してきたのかを考えてみることにしました。

(1) フリークライミングの変遷

日本におけるフリークライミングの黎明期、当時のアメリカ、花崗岩を舞台としたヨセミテのフリークライミングは、世界で大きな影響力をもっていました。ナチュラルプロテクションによるクラッククライミング全盛の頃です。クライミング全般において後進国であった日本でも、先進的なクライマーがヨセミテへ渡り、フリークライミングの洗礼を受け、そしてそれを国内で実践していく過程でフリークライミングが広まってゆきました。その頃の日本はアメリカのフリークライミングの影響を強く受けていたのです。

当時の山岳雑誌を読み返すとフリークライミングについてかなり情熱的な研究論文やエッセイが載っております。フリークライミングという新しい概念について、その実践、方向性はどうかあるべきか真剣に摸索していた頃だったのです。

ここである論文(1967年発表)¹⁾の一節を引用します。かなり表現が固い文章ですが、ルールという視点から、当時のフリークライミングの概念についてかなり説得力ある持論を展開しています。

『ルールの目的は本質的に防御的であり、保守的である。つまりクライミングのルールは、クライマーの個人的、道徳的（主観的）な達成感を、単に無意味なテクノロジーの勝利を代弁する成

3. スポーツクライミング

功に墮落してしまうことから護るように設計してあるのだ。』とあります。そのルールを厳しく体现したものがフリークライミングである、とここでは述べています。『クライミングゲームのルールは、その目的は積極的だが、否定形として表現される。』すなわち、ピトンに荷重してはいけない、ロープに頼ってはいけない（ハングドックしてはいけない）、岩を傷つけてはいけない、etc…。これらの多くのルールを守るか否か、すなわちスタイルについてどうこだわるか、というのが大きなテーマであったのです。当時、フリークライミングは厳しい倫理観に基づいていました。それらのルールに基づいて時として大きな危険を犯してまでも成功の達成感を味わうために果敢に挑戦をしていました。『結末にある程度の不確実さを残すようにルールを適用することでその不確実さがクライミングの冒険の要素と個人的な満足感を生じる源』となっていたとこの論文では結んでいます。

クリーン・クラッククライミング全盛の頃では、『不必要な安全性は鍛えられた肉体、技術、精神力に取って変わられるべきだ』というクライマー個々のプライドや情熱に裏打ちされた主観的なスタイルがありました。もちろんルートを完登することは重要でしたが、それと同じ程度にその時のスタイルが重視されたのです。そうすることで、フリークライミングに『冒険』としての要素を存続させておきたいという願いが込められていたのだ、と理解しています。

それから数年がたち、フリークライミングの先進地はヨセミテから徐々にフランスの石灰岩へと移っていきました。フランスのフリークライマーは、クラッククライミングでは切り離せないプロテクションに対する駆け引きを否定する（厳密にはナチュラルプロテクションを利用できる岩質ではなかった）代わりにクラックに比べてムーブが格段に難しく多彩なフェース上でのパフォーマンスを目指しました。フェースクライミングは次第に世界で注目され、日本でもフリークライマーの対象は一気にクラックからフェースへと移っていきました。

フェースクライミングが主流となってクライミングのルールは大幅に変化しました。クラッククライミングの必然的なルール、プリプロテクションの否定（プロテクションに対するある程度の不確実さ）は無用になり、ムーブの追究という目的以外の技術は重要性をだんだん失っていきました。この流れを大きく推し進めたテクノロジーとしては、高い強度を誇るボルトの出現があると考えます。それは電動ドリルと併用されるようになって国内でも爆発的なフェースルート開拓ラッシュをスタートさせることとなります。このハンガータイプの高強度ボルトと電動ドリルの導入は、クラック全盛の頃、日本にフレンズが紹介された時と比べれば幾分地味ではあるとおもいますが、確実にスタイル（ルール）を変えた登攀用具の一つです。

こうして墮落はクライミングの大きなリスクではなく、ルートをトライするときの自然な姿となりました。そしてプロテクションに対する倫理感、認識はどんどん変化します。最初にマスタースタイルが、そしてさらに進んでレッドポイントへ。今ではボルトの一本目にクリップした状態から

3. スポーツクライミング

のスタートが常識となりつつあります。またクラッククライミングでもピンクポイントと言うプリプロテクションのスタイルが用いられるようになるなど、プロテクションのセッティング技術がフェースクライミングではロープクリップといった程度の意味しかもたないものに成り下がりました。

今、レッドポイントというこれ以上ない程に安全性が高く、合理化されたルールが定着している現状で、スタイルに一体どれ程の価値があるというのでしょうか。ルートをトライする何者にとっても安全性が確保されるという『客観的な安全性』がルールとなり、フェースクライミングで重視すべきはスタイルの在り方ではなく、ジムナスティックなムーブの追求がなによりも優先され、『ルートを完登すること』が評価されるようになりました。こうしてクライミングはスポーツになったのです。

このことは、クライミング本来のもつ自然な（原始的な、基本的な）動作＝攀じること、を純粋に楽しみ喜ぶことへの回帰、だと言えるのではないかと思います。一見、快楽主義、合理主義的ではありますが、クライミングを純粋に楽しみ尽くそうという態度への移り変わりがフリークライミングをスポーツへと推し進めて行く上で大きな力になったと考えます。

(2) 人工壁

現在、フリークライミングをスポーツとして知名度を上げるのに大きく貢献しているのは人工壁の普及であることに間違いありません。人里近い場所には岩場が少ないこの日本において、クライミングの『場』を一般の人々にも身近かなものにするとともに、その活動場所のイメージを危険性の高い『岩壁』から安全な『クライミング・ウォール』へと変え、クライミングそのもののイメージをも快適で、安全にスリルの味わえるスポーツへと変えました。

今年の梅雨時、長野の人工壁・KITAウォールに登りにいった際、ちょうど長野県下の高校山岳部が集まってクライミングの講習会を行っているところでした。顧問の先生方が熱心で、生徒達もなかなか活気があって楽しそうでした。また長野県南信の方の高校では今年、ある先生の働きかけで体育館に人工壁がつく、友人がインストラクターとして教えにいったそうです。すでに長野県下の3つの高校には体育館に人工壁が設置されています。これらのことは徐々にクライミングが危険なものだという従来の認識が教育の側も変わってきたという証拠です。また松本市民体育館の前庭にクライミングボードが設置されています。行政もだいぶ変わってきたようです。

もう10年以上昔の話になりますが私のは高校山岳部時代、クライミングは禁止事項になっておりました。しかたなく仲間と隠れてこそこそと学校の裏の石垣を登ってはクライミングへの憧れを募らせていたことを思い返すとずいぶんと変わったものです。

長野県の高校山岳部の例を考えると『人工壁』という外因的（落石等の）な危険性のない場があったからこそ（造りだしたからこそ）可能になったことなのではないでしょうか。実際に顧問

3. スポーツクライミング

の先生に聞いてみると、自然のゲレンデで講習会をすることは監督責任者の立場としては大きな冒険だと言っておりました。クライミングそのものの危険性もさることながら『岩壁』というものに対する警戒感は強いのでしょう。人工的な場という雰囲気はかなりその警戒感を和らげる要素になったのだろうと推察します。今の日本の管理教育の下では無理からぬことですが、なにせよ禁止一点張りのころからみればスポーツとしてクライミングに親しんでくれる機会が増えたことは大きな進歩と考えてよいでしょう。

(3) 競技として

スポーツには競技性とでも言うのでしょうか、互いに競い合い、客観的な結果をだす、ということとその本質としてもっている考えます。強いのは誰か、自分のレベルはどれくらいなのか、といったプレーヤーにとって必然的な疑問に答え得るスポーツは先鋭的になれる資格があり、また多くのプレーヤーに支持されてゆくと考えます。その点ではクライミングは大きく進歩しました。

日本においても一般的なデジタルグレード体系は、客観的で納得のゆくものになっています。また近年盛んに行われているクライミングコンペは、誰が強いのかという問いに対して、はっきりとその答えをだしてくれます。JFAによるシリーズ戦、『ジャパントア』が開かれ、各地を転戦しています。このクライミングコンペにおいて主流になっているルール、オンサイト方式は公平でいてシンプルであり、選手側も観戦する側も納得できる分かり易いルールとなっています。

また将来オリンピックの公開競技になるかもしれないという期待もあります。オリンピックについては全くの夢ではない段階にきているそうです。もし実現すれば一層スポーツクライマー人口が増え、世間一般のスポーツクライミングに対する興味と理解を深めてくれるだろうと期待しております。

(4) スポーツクライミングの方向

さて今後、スポーツクライミングはどのように進化していくのでしょうか。私は、特に日本においては、人工壁をそのフィールドとするインドアクライミングを自指すようになってゆくのではないかと.....とそんなことを強く予感しています。

今のフリークライマーの中には、人工壁からクライミングを始めたという人もいますし、また今はすっかり人工壁しか登らなくなったという人もいます。この先フリークライミングがスポーツとしての認知度が高まれば高まる程、人工壁を舞台としたインドアスポーツとしての傾向が強まるのではないのでしょうか。今はスポーツクライミングとフリークライミングは同義語のように使われていますが、近い将来、これらはそれぞれ違った方向に進んでゆくのではないかと思います。ナチュラルプロテクションによる伝統的なクライミングと現在のフェースクライミングが大きく道を分けたように。

その流れは、クライミングコンペという新しいスタイルのクライミングがさらに推し進めていく

3. スポーツクライミング

ことになるでしょう。そうなるとスポーツクライミングは、自然な形状（岩壁）には縛られない極限的な新ムーブを創造していくというようになってゆくのではないかと想像します。

現在、世界のフリーの最先端はデジマルグレードで5.14c～dぐらいでしょうか。それはまた格段に進歩していくことでしょうか。将来は体操競技のようにE難度のムーブを編み出しては、試合で繰り出すといったようになっていくのかもしれませんが……。

(4) スポーツとしての課題

このところクライミングジムでも、クライミング中の事故が度々起きているという話を聞きました。クライミングは、重力との駆け引きである以上、ある程度危険がつきまとうことはいたしかたありません。スポーツクライミングといえどクライマーの側に起因する危険性（人為的ミス）は最終的にゼロにはなり得ません。安全が確保されなければスポーツとしては認められぬ以上、このことはスポーツとして発展していくためにいずれ足かせになるでしょう。スポーツとして手軽にクライミングに親んでもらうことは喜ばしいことですが、アルパインクライミングの山岳会で育ってきた者からすれば、フリークライミングオンリーで始めた初心者クライマーは観ていてとても危険な場合があります。初期の段階で正しく理解してもらうために『指導者と技術習得の方法論』を研究することはこれからクライミングがスポーツとして普及していくにあたって重要な課題であると考えます。

(5) アルパインクライミングの立場として

何年前か前、岩にホールドを刻んでルートを作った行為に対してクライマーが色めきだったことがありました。それに対する意見として山岳雑誌に載せられていたものの中には、あるフリークライマーのもので『ルートの難度を上げるためならガバホールドを叩き落としてもかまわない……』というものがあってとても残念な気持ちがあったのを覚えています。クライミングを完全にスポーツと認識してしまうと、クライマーはこう考えてしまうのだなあと思えました。ルートを創造することはまあ立派なことですが、『ルートの難度こそすべて！』という考えの人は、是非とも人工壁でもって最難度のルートやムーブを創造することに喜びを見出してほしいものです。決して自然の岩場でクライミングをするべきではない。自然の岩場には主観的な価値観に基づいたルールがあって然るべきで、そしてそれは相互に尊重されるべきだ、ということをアルパインクライマーの立場として強く思います。

今まで述べてきたスポーツクライミングの方向は、概ね歓迎すべきことだと思います。確かにインドアスポーツへと変わっていく可能性を示唆する今の流れはアルパインクライマーには寂しい話ではありますが、スポーツとしてこの日本に受け入れられるとあればいたしかたないことなのかもしれません。少年たちにとってスポーツとしてクライミングに触れる機会が増えていくことは、なににせよ

3. スポーツクライミング

ことになるでしょう。そうなるスポーツクライミングは、自然な形状（岩壁）には縛られない極限的な新ムーブを創造していくというようになってゆくのではないかと想像します。

現在、世界のフリーの最先端はデジマルグレードで5.14c～dぐらいでしょうか。それはまた格段に進歩していくことでしょう。将来は体操競技のようにE難度のムーブを編み出しては、試合で繰り出すといったようになっていくのかもしれませんが……。

(4) スポーツとしての課題

このところクライミングジムでも、クライミング中の事故が度々起きているという話を聞きました。クライミングは、重力との駆け引きである以上、ある程度危険がつきまとうことはいたしかたありません。スポーツクライミングといえどクライマーの側に起因する危険性（人為的ミス）は最終的にゼロにはなり得ません。安全が確保されなければスポーツとしては認められぬ以上、このことはスポーツとして発展していくためにいずれ足かせになるでしょう。スポーツとして手軽にクライミングに親んでもらうことは喜ばしいことですが、アルパインクライミングの山岳会で育ってきた者からすれば、フリークライミングオンリーで始めた初心者クライマーは観ていてとても危険な場合があります。初期の段階で正しく理解してもらうために『指導者と技術習得の方法論』を研究することはこれからクライミングがスポーツとして普及していくにあたって重要な課題であると考えます。

(5) アルパインクライミングの立場として

何年前か前、岩にホールドを刻んでルートを作った行為に対してクライマーが色めきだったことがありました。それに対する意見として山岳雑誌に載せられていたものの中には、あるフリークライマーのもので『ルートの難度を上げるためならガバホールドを叩き落としてもかまわない……』というものがあってとても残念な気持ちがあったのを覚えています。クライミングを完全にスポーツと認識してしまうと、クライマーはこう考えてしまうのだなあと思えました。ルートを創造することはまあ立派なことですが、『ルートの難度こそすべて！』という考えの人は、是非とも人工壁でもって最難度のルートやムーブを創造することに喜びを見出してほしいものです。決して自然の岩場でクライミングをするべきではない。自然の岩場には主観的な価値観に基づいたルールがあって然るべきで、そしてそれは相互に尊重されるべきだ、ということアルパインクライマーの立場として強く思います。

今まで述べてきたスポーツクライミングの方向は、概ね歓迎すべきことだと思います。確かにインドアスポーツへと変わっていく可能性を示唆する今の流れはアルパインクライマーには寂しい話ではありますが、スポーツとしてこの日本に受け入れられるとあればいたしかたないことなのかもしれません。少年たちにとってスポーツとしてクライミングに触れる機会が増えていくことは、なににせよ

3. スポーツクライミング

歓迎すべきことです。

山岳の雄大さ、美しさ、厳しさに感動を覚えた若き少年少女が、まずはスポーツとして親しむことから始めて、後にクライミングのもつ可能性を広めてくれることを期待したいと思います。

2. アルパインクライマーとして

(1) スポーツクライミングの影響

地方の山岳会に入会し、私に最初にクライミングを指導してくれた先輩は生粋のフリークライマーでした。そのせいかアルパイン主体の山岳会だったのですが、フリークライミングとアルパインクライミングのどちらも区別せず、『クライミング』として自分の目標に考えるようになって今日に至っています。もちろんアルパインクライミングが最大の課題ですが、スポーツとしても同じように全力で取り組むべき課題なのです。

『積雪期は全てアルパインルートへ。無雪期はフリー中心。無雪期の国内のアルパインルートに登る意義は薄れたままにエイドルートを登りに行く程度。それならワイドクラックでも練習した方がよっぽどためになる。シーズンを問わず平日は出来る限り人工壁へ通う』というのが現在の私の年間クライミングパターンです。実際私の仲間をはじめこのような若いクライマーは多いです。これらフリーもアルパインも、そしてスポーツとしても境界なしにクライミングを追求しようという姿勢が、スポーツクライミングが近頃のアルパインクライマーに与えた影響だと言えるのかもしれないと思います。

(2) スポーツから学ぶ点

スポーツクライミングに全精力を傾ける人と一緒に登る機会を得てから個人的に問題意識を持ったことは、『(アルパインクライミングも肉体を酷使するという点で) スポーツである以上、科学的なトレーニングなくして発展はあり得ない』と強く再認識した点です。

スポーツクライミングでは実に明快です。能力のない奴はただ漫然とトライを繰り返しても向上しません。つきつめれば才能も問題になるのですが、よく考えて地道に能力を高める努力が必要です。他のスポーツ選手と自分を比較すると、自己管理やトレーニング方法、モチベーションの持続などの面で猛省すべき点が多いです。自分の目標達成のためにはなにをすべきかを分析的に考える必要があると感じます。

(3) 今後の課題

『登山において真の課題はクライミングに内在している』と私も確信しています。とすれば高度なフリークライミング能力抜きでは語れなくなっている今のアルパインクライミングの流れは、敢えてフリークライミングの影響と理由付けする必要もない至極自然な流れです。

最近、ビックウォールクライミングが一つの独立したジャンルのように言われています。そちらの方ではフリークライミングが単に方法としてではなく、目的としての意味をもち始めてきまし

3. スポーツクライミング

た。アルプスやヨセミテではもうだいぶ以前から、そして最近のトランゴ山群やパタゴニアで展開されているクライミングは既成ルートのフリー化から、フリー主体のルート開拓まで行われています。それはもはやアルパインの新しい流れなのかフリークライミングの進歩なのかを問題に取り上げることはナンセンスになってしまいました。この方向は今後ますます注目されていくことは間違いないでしょう。

クライミングそのものを目的とした高峰登山、私個人の目標もそこにあります。圧倒的な岩壁を超えてルートの終了点（頂上）を目指す、そのような考え方で自分に出来る限り冒険的な登山を実践することを課題と考えています。

以前、登山として総合力を問われる課題としてラトックの北稜などどうだろうと思ったことがありました。私の実力を知っている人には全くの笑い話ですが、イメージ上で自分なりにシュミレートしてみたことがあります。実際にラトック I 峰北稜に挑んだノルウェー隊の報告では、難度は 5.10, A 3, 全体を通して 5.8 を下ることはなかったとありました。どちらにせよ、クライミング能力にも秀でたクライマーがこれからのアルパインクライミングを推し進めて行くことになるのは間違いなさそうです。

文 献

- 1) リド・テハダ＝フローレス著

「クライマーの演じるゲームについて」

(松本クライミングメイトクラブ)